

エステル記 5 章 6 章

エステル記 5 章の背景と行動に出たエステル

5 章

1,三日目になり、エステルは王妃の衣装を着て、王室の正面にある王宮の奥の中庭に立った。王は王室の入り口の正面にある王宮の玉座に座っていた。

「三日目になり」と書かれているが、じゃあ 1 日目と 2 日目は？

ユダヤ人のみなしごエステルが宮仕えをするようになり、当時の一大帝国であったペルシャ帝国の王妃にまで上り詰めて、5 年近くが過ぎたころ、国王のお気に入りハマンに膝をかがめなかったエステルの養父モルデカイが原因で、ユダヤ人全体が皆殺しになるという法令が發布されてしまった。その時、養父モルデカイはエステルに対し、神の召しに従わないことへの警告をし、意を決したエステルは言った。「行って、スサにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食してください。三日三晩、食べたり飲んだりしないようにしてください。私も私の侍女たちも、同じように断食します。そのようにしたうえで、法令に背くことですが、私は王のところへ参ります。私は、死ななければならないのでしたら死にます。」(エステル記 4 章 16 節)「三日三晩、食べたり飲んだりしないようにしてください。」の三日のことだ。つまり、スサにいるユダヤ人たち並びにエステルと彼女のお付きの女性たちがみな断食祈禱を続けて三日目。

「エステルは王妃の衣装を着て」ということは、エステルは断食祈禱中、王妃の衣装を着ていなかった。当然ですね。祈りは神の前に出てするわけだから。王妃の衣装は必要ではないし、逆に神の前に出て祈るのは自分自身が謙虚でなければならないし、着るのは世の中の地位を表すような王妃の服ではなく、キリストの義を身にまとわないといけないのだから。当時のユダヤ人がキリストの義を身にまとうということをどれほど意識できたかは分からないが、信仰深い人であれば、自分の義を身にまとっていたのではだめだと分かっていたはず。

そして、その時大きな悲しみに包まれていたのだから、粗布をまとい、灰を被っての断食祈禱だったのかもしれない。

十分祈りを主の前に注ぎだした後、エステルは王に謁見する際に適切な王妃の衣装を着た。神がエステルに与えてくださった、王妃というポジションを最大限に利用する時が来たことにエステルは気づき、それに必要な準備をしたと考えられる。

エステルが目指すは、王のいる所。ということで、「王室の正面にある王宮の奥の中庭に立った」わけだ。王がいたのが、「王室の入り口の正面にある王宮の玉座」だったので、王から見える位置に行ったことが分かる。

2,王が、中庭に立っている王妃エステルを見たとき、彼女は王の好意を得た。王は手にしている金の笏をエステルに差し伸ばした。エステルは近寄って、その笏の先に触れた。

「彼女は王の好意を得た」と書かれているが、クリスチャンではない人がこれを読めば、王に気に入られたとってしまうだろうが…この「好意を得た」という言葉は、どうしてもクリスチャンなら、神の導き、摂理、采配を連想せずにはいられない。そもそも一か月も王様とはご無沙汰だったエステル。王様から好意を得ることができる保証はない。特にこの王様は相当な気分屋だ。ペルシャの国の法令を破って、王様の近くをうろうろしているエステルを処罰することも十分にできたはず。しかし、王は法令の中にある例外の行為をした。「金の笏をエステルに差し伸ばした」のである。これで、エステルは死ななくてもよくなった。

「エステルは近寄って、その笏の先に触れた。」とあるが、王の寛大な計らいを受け入れるという意味があったのであろう。

王とエステルの会話

3,王は彼女に言った。「どうしたのだ。王妃エステル。何を望んでいるのか。王国の半分でも、あなたにやれるのだが。」

法令を破ってまで王の近くまで来たエステルに対し、王は自分なりの忖度をする。きっと何か自分に願い事があるんだと。しかし、「王国の半分でも、あなたにやれるのだが。」と、いくら自分が気に入っている女性の願いでも、大国の国王が言う言葉なのかな？と疑問に思ってしまう。領主ヘロデも似たような約束をした。略奪婚した妻の連れ子のヘロディアに対し、「マタ 14:7 それで彼は娘に誓い、求める物は何でも与えると約束した。」バプテスマのヨハネの首を求められてしまい、嫌と言えば、面子がなくなるので、ヘロデは切りたくもない首を切る羽目になった。王様も似たような危険はあったはず。しかし、王たる者、当時はそのぐらいいは言わないといけなかったのかも。

4,エステルは答えた。「もしも王様がよろしければ、今日、私が王様のために設ける宴会にハマンとご一緒にお越しください。」

王に欲しいものを聞かれてもすぐに要求をしないエステル。ただ、自分が王様のために設ける宴会にハマンと一緒に来てくださいと伝える。エステルは、かなり慎重だ。王様に対してもそうだし、王のお取り巻きに対しても、慎重に行動する必要があったと考えられる。それで、先ずは様子見をしているようだ。

5,すると王は「ハマンを急いで来させて、エステルの言ったようにしよう」と言った。王とハ

マンはエステルが設けた宴会にやって来た。

王はエステルの言うとおりにした。しかもハマンを急いで来させるようにした。そして実際、エステルのお願ひ通りに、王とハマンはエステルが設けた宴会に来た。

6,その酒宴の席上、王はエステルに尋ねた。「あなたは何を願っているのか。それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう。」

王はエステルがただ単に二人が宴会に来ることを望んでいたのではないことは、お見通しだった。またしても、「王国の半分でも、それをかなえてやろう。」とすごい言い方だが、先にも書いたが、これは王の常套句。

7,エステルは答えて言った。「私が願ひ、望んでいることは、8,もしも私が王様のご好意を受けることができ、また王様がよろしくて、私の願ひをゆるし、私の望みをかなえていただけますなら、私が設ける宴会に、もう一度ハマンとご一緒にお越してください。そうすれば、明日、私は王様のおっしゃったとおりにいたします。」

しかし、エステルはまたしても、すぐには自分の望みは言わず、王の好意を確かに得ることができているかを慎重に確認するような動きだ。石橋を3度叩いているエステル。結果的に、翌日に持ち越すことで、さらに神が用意してくださっている、より大きなことが起こることにつながる。ユダヤ人が助かるだけでなく、モルデカイの功績が明らかとなり、王からの褒美を得、悪事を働いたハマン一族が滅びることになる。

ハマンの反応

9,ハマンはその日、喜び上機嫌で去って行った。ところが、ハマンは、王の門のところにいるモルデカイが立ち上がろうともせず、身動きもしないのを見て、モルデカイに対する憤りに満たされた。

エステルから直々に宴会にお誘いを受け、すっかりいい気になっているハマン。王の好意のみならず王妃の好意も得ていると勘違い。しかし、帰り道にモルデカイに会ってしまう。この時点でモルデカイは王の門のところにいた。「立ち上がろうともせず、身動きもしない」モルデカイ。ハマンという人を恐れることをせず、神により頼み続けるモルデカイの姿を見ることができる。依然として、自分に対しひれ伏さないモルデカイに対し、ハマンは怒り心頭。モルデカイの方が、心穏やかであったのではなかろうか。

10,しかし、ハマンは我慢して家に帰り、人を送って、友人たちと妻ゼレシュを連れて来させた。

しかし、ハマンはここで切れるのではなく、我慢して家に帰った。ハマンを処罰するより、自慢話を友人と妻にする方が先だったようだ。たまたま友人たちと妻が家にいたのではなく、ハマンが「連れて来させた」のだ。

ハマンの自慢話

11、ハマンは自分の輝かしい富について、また子どもが大勢いることや、王が自分を重んじ、王の首長や家臣たちの上に自分を昇進させてくれたことなどを、すべて彼らに話した。

わざわざ友人を呼んで、妻も同席させ話したのは、自慢話。「自分の輝かしい富」「子どもが大勢いること」「王が自分を重んじ、王の首長や家臣たちの上に自分を昇進させてくれた」自分の持ち物や名誉など、肉のわざばかり追求するハマン。

12、ハマンは言った。「しかも王妃エステルは、王妃が設けた宴会に、私のほかはだれも王と一緒に来させなかった。明日も私は、王と一緒に王妃に招かれている。

更に、自分は王妃エステルと特別な親しい関係にあることも自慢。持ち物だけでなく、自分の持つ人間関係まで、自慢話は広がる。王妃エステルが宴会にハマンを誘ったことだが、ハマンは完全に勘違いしている。神様に高くしてもらうのではなく、ハマンは自分で自分を高くしているところに、問題がある。後で、一気に引き落とされることとなる。

モルデカイ対策を謀議

13、しかし、私が、王の門のところに座っているあのユダヤ人モルデカイを見なければならぬ間は、これら一切のことも私には何の役にも立たない。」

ハマンは連れてきた友人たちと妻にモルデカイについての愚痴を言う。ハマンは富も子供も王に可愛がられているという立場など嬉しいことがいっぱいあるにもかかわらず、それに感謝し満足するのではなく、モルデカイという目の上のたんこぶ的存在が気になって仕方ないために、自らを破滅の道に置いてしまう。

14、すると、彼の妻ゼレシュと彼の友人たちはみな彼に言った。「高さ五十キュビトの柱を立てさせて、明日の朝、王に話して、モルデカイをそれにかけるようにしなさい。それから、王と一緒に、喜んでその宴会にお出かけなさい。」ハマンはこの進言が気に入ったので、その柱を立てさせた。

モルデカイについて、ハマンの友人たちだけでなく、妻のゼレシュまでモルデカイの処刑方法をいっしょに考えた。ユダヤ人の処刑日はもう少し先だったにもかかわらず、事を急いでいる。「明日の朝、王に話して」。

1 キュビトは 44 センチということは、ハマンを処刑する柱は 22 腕。いくら何でも高すぎませんか？そして、友人たちと妻のアドバイスは、先ず明日の朝一に王様にモルデカイを処罰する許可をもらい、モルデカイを抹殺して、それから気分さわやかに、エステル¹の宴会に行くようにとのこと。人を殺して、喜ぶという考え方自体、さすがハマンの妻のゼレシュ²って感じだ。似たもの夫婦。

6 章

神の守りの御手

1,その夜、王は眠れなかったので、記録の書、年代記を持って来るように命じた。そしてそれは王の前で読まれた。

昼間に、ハマンたちはモルデカイを抹殺する方法を謀議したが、一方神の守りの御手が動き始めていた。「その夜」とあるが、神は夜だからと言って、まどろむ方ではない。モルデカイを守るために働いておられたことが分かる。王が眠ることができぬようにし、不眠症の王様ができることはたくさんあったであろうに（例えば、軽音楽を奏でさせるとか、小説を読ませるとか）、なぜか「記録の書、年代記を持って来るように命じた」。これが、神の計らいでなかったら、何なのだろうってところだ。

2,その中に、入り口を守っていた王の二人の宦官ビグタナとテレシュが、クセルクセス王を殺そうとしていることをモルデカイが報告した、と書かれているのを見つけた。

王は、自分を暗殺しようとしている宦官がいることをモルデカイが報告したことに気づく。人間はいろいろなことを見過ごすかもしれない、特に大国の王様であれば、国中で起こっている出来事が次々と上奏されてくるので、一々気に留めるのも難しいのだろうが、神は全てのことをご存知で、神の時に、それを明らかにして下さる。その素晴らしさを見ることができる。そして、人はすぐに自分のした結果を求めるが、神は神の時にそれを用いてくださる。モルデカイが王様暗殺の企みをしている宦官たちの報告をしたのがいつか、具体的なことは分からないが、少なくとも数年は経過していたはず。神の時があり、その神の時に神の御手が働くことを私たちは知って、待つことができるだろうか？エステルとモルデカイはそれができたのではないだろうか。それができる者が神のわざを見ることができるし、すべてを益として働いてくださる神に出会うことができる。

3,そこで王は尋ねた。「このことで、栄誉とか昇進とか、何かモルデカイに与えたか。」王に仕える侍従たちは答えた。「彼には何もしていません。」

王は自分の暗殺計画に関することだったという理由もあって、気になったのであろう。報告してくれたモルデカイに褒美を与えたかどうかのチェックをする。すると、モルデカイの忠義に対する報酬が何も与えられていなかったことが判明する。

4,王は言った。「庭にだれがいるのか。」ちょうどハマンが、モルデカイのために準備した柱に彼をかけることを王に上奏しようと、王宮の外庭に入って来たところであった。

眠ることができなかった王は、モルデカイへの褒美を考えたころには、夜が明けていたようだ。ちょうどその時、王とは真逆の考えと計画を持つハマンが王宮の外庭に入ってきたのだが、王はその気配に気づいた。

ハマンもまたモルデカイ征伐のためにほとんど寝ていなかったに違いない(モルデカイをかける 22メートル近い柱を朝までに立てるのはたやすいことではなかろう)。悪の勢力の暗躍も夜通しだったが、神の守りの手のはからいも夜通しで、どちらが勝つかは、火を見るよりも明らか。この「ちょうど」と言う言葉は、神の時、神のタイミングを表している。

とにかく、ハマンもそんなに早く起きて・・・というかモルデカイ殺したさで、こんなに早く来たのであろう。しかし、そのようなことも、神はお用いになっているところが、すごい。

ハマンにアドバイスを求める王

5,王に仕える侍従たちは王に言った。「庭のあそこにハマンがいます。」王は言った。「ここに通せ。」

王がモルデカイへの褒美は何が良いか考え始めたちょうどその時に、王の腹心のハマンが入ってきた。王としてはアイデアをゲットするのに、好都合。ところで、宦官やら家来やら、王のお取り巻きが王様の代わりに政策や法令をどんどん考えてしまうので、王は自分のいのちを救ってくれた者への褒美すら、自分で考えられない。何だか情けない王様だが、それをも神は用いられる。

6,ハマンが入って来ると、王は彼に言った。「王が栄誉を与えたいと思う者には、どうしたらよかろう。」ハマンは心のうちで思った。「王が栄誉を与えたいと思う者とは、私以外にだれがいるだろう。」

王が栄誉を与えたいと思う者はモルデカイであったのに、ハマンはてっきり自分だと思い込んでしまった。とんだ勘違いだが、そのせいで、というかそのおかげで、モルデカイは良いものを得ることになる。エステルが王様に謁見してすぐさま自分のお願いを言わず、次の日まで待ったことで、神が用意してくださっているもっと素晴らしいものを受け取ることができたのだ。

7,そこでハマンは王に言った。「王が栄誉を与えたいと思われる人のためには、8,王が着ておられた王服を持って来て、また、王の乗られた馬を、その頭に王冠をつけて引いて来るようにしてください。9,その王服と馬を、貴族である王の首長の一人の手に渡し、

王が栄誉を与えたいと思われる人に王服を着せ、その人を馬に乗せて都の広場に導き、その前で『王が栄誉を与えたいと思われる人はこのとおりである』と、ふれまわらせてください。」

ハマンが求めたのは、王と同等の地位に就くことだった。王服、馬、王冠、そして、それを都の広場で人々に知らしめること。自惚れにも程がある。しかし、自分を高くすることを考えたハマンは、それをそっくりそのまま自分が一番与えたくない者に与えることとなる。

10,すると、王はハマンに言った。「あなたが言ったとおりに、すぐ王服と馬を取って来て、王の門のところに座っているユダヤ人モルデカイにそのようにしなさい。あなたの言ったことを一つも怠ってはならない。」

王はハマンの提案をそのままそっくり受け入れ、しかも、「すぐ」、「言ったことを一つも怠ってはならない」とは…。しかし、それをする相手は、よりによってハマンが殺してやりたいと思っていたモルデカイだとは、皮肉。家来が上奏してくる法令に王は、ほぼめくら判を押ししていたのであろう。王はモルデカイが皆殺し対象であることに気づいていない。王は、「王の門のところに座っているユダヤ人モルデカイにそのようにしなさい」と言っている。この命令を出した時点で、王はモルデカイがユダヤ人であることを知っていた。

11,ハマンは王服と馬を取って来て、モルデカイに着せ、彼を馬に乗せて都の広場に導き、その前で「王が栄誉を与えたいと思われる人はこのとおりである」と叫んだ。

王の命令に逆らえず、その通りにするハマン。モルデカイを殺したさに早朝から王宮に出かけたのに、モルデカイを殺すどころか、王の栄誉を受けているモルデカイの馬子をしながら、モルデカイの栄誉のアナウンス係をする羽目に。

12,それからモルデカイは王の門に戻ったが、ハマンは嘆き悲しんで頭をおおい、急いで家に帰った。

モルデカイは王の門に戻り、以前の仕事に戻ったようだが、その一方でハマンは面目丸つぶれで、急いで家に帰った。自分を高めようとする者は低くされるという神のことばの良い例だ。

13,ハマンは自分の身に起こったことの一部始終を、妻ゼレシュと彼のすべての友人たちに話した。すると、知恵のある者たちと妻ゼレシュは彼に言った。「あなたはモルデカイに敗れかけていますが、このモルデカイがユダヤ民族の一人であるなら、あなたはもう彼に勝つことはできません。必ずやあなたは敗れるでしょう。」

家に帰るなり、ハマンは妻と友人すべてに何が起きたか一部始終を話した。愚痴を聞いてもらいたかっただろうし、何かアドバイスも欲しかったのだろう。しかし、妻と友人たちの言葉は、正しいが、残酷。「あなたはもう彼に勝つことはできません。必ずやあなたは敗れるでしょう。」今の劣勢は、完全な敗北に終わることを予告される。友人が言うならまだしも、ハマンの妻までこの発言？もう少し慰める言葉とか、エステル対策とか何かなかったのでしょうか？

14.彼らがまだハマンと話しているうちに、王の宦官たちがやって来て、ハマンを急がせて、エステルの設けた宴会に連れて行った。

間髪入れずに、王の宦官がハマンを迎えに来て、エステルの宴会に行くことになってしまった。何の対策も立てられぬまま、エステルのところに行かなくてはならなくなってしまったハマン。